

三人のアイドル

*この小説はフィクションであり実在する団体・人物とはいっさい関係ありません。

第一章 美少女優等生



明彦が、親の仕事の関係で四国にあるその高校に転校したのは、4年前のことだった。「ふん、こんな田舎か」
空港に降り立った明彦は、いかにも鄙びた地方都市の風情に軽蔑の念を隠さなかった。彼は東京では名門とされている私立高校に通っていた。成績は上位にいて、東大だって狙えるポジションにいる。

「明彦ちゃんだったら、絶対に一番になれるはずよ」

教育熱心なママもそう言っていた。

転校して2週間目でさっそく中間テストが行われた。手応えはあった。明彦は、成績発表の日をわくわくして待った。

だが、張り出された成績表を見て、明彦は愕然となった。彼は2番だった。彼の名前の上に女子生徒の名があった。しかも20点以上も引き離されている。

しかも、彼よりも上位にいる女子生徒が問題だった。

明彦は、その女子生徒とはクラスが違うので、1、2度しか見たことがない。165センチと背は高いが、おかつ頭のさほど目立つ容姿ではない。ただ、スカートから伸びた脚はきれいで、ウエストは引き締まっていた。いいスタイルだな、と明彦は思った。

中間試験から一週間後、ふと立ち寄ったコンビニの男性雑誌のグラビアをめくっていた明彦は、仰天して手をとめた。水着でポーズをとる美少女は、まぎれもなく、あの女子生徒だった。

すんなりと伸びた手脚。ピンクの水着のブラの間にくつきりと深く刻まれた胸の谷間。まさか、転校してきたこんな田舎高校に、巨乳美少女アイドルが在籍していたとは！

しかも、自分よりもはるかに成績がいいのだ！

明彦は、自分と同世代でアイドルだのタレントだのやっている輩は、どうせ落ちこぼれて派手な恰好で繁華街をうろついているうちに、タレント事務所にナンパされ、仕事を得るためなら平

気でプロデューサーと一晚ベッドをともにするような連中だと信じ込んでいた。

そういう輩が、自分よりもいい成績をおさめている。この事実を明彦は受け入れることができなかった。

「なんで1番じゃなかったの！」

2番だったと報告したとき、ママは金切り声を張り上げて明彦を責めた。彼女はもともと、夫が東京の本社から地方の事務所に異動になったことを許しがたく思っていたし、まして、明彦が高校2年生という大事な時期に転校することにも反対していた。その悔しさから、ますます教育熱心ぶりに拍車がかかっていたのだ。

「もし、明彦が志望大学に受からなかったら、あなたのせいですからね！」

毎夜、パパと口論する度に、ママはこう叫ぶのだ。

そのプレッシャーが明彦に重くのしかかった。

期末試験には、あの女を抜いて1位にならなければなきゃ……。明彦は毎夜、必死に勉強した。だが、自分の部屋に入り、机に向かったとたん、あのグラビアに掲載されていた女子生徒の水着姿が脳裏に浮かび、勉強どころではなかった。参考書のページはちっとも進まず、かわりにティッシュペーパーの残骸だけがごみ箱に溜まっていった。

「かをりく、ちゃんと勉強できたん？」

「ううん。撮影の仕事が入ったけん…今日も寝不足なんよ」

「また写真集出すん？」

「冬までの雑誌に出すぶんまとめ撮りしたんよ…暑いのにセーター着せられて、しんどかったんよお」

こんな会話を、あの女子生徒がクラスメートの女の子たちと交わしているのを、明彦は耳にした。

そうか。今度という今度は絶対にあの女に勝たなくちゃ。

明彦は救われた気分になった。だが同時に、彼女がカメラマンの前で、あの巨乳を揺すりながらポーズをとっている場面が思い浮かび、ますます勉強には身が入らなくなったのも事実だった。果して期末試験。明彦は4位だった。あの女子生徒は連続1位。しかも明彦に40点差をつけていた。差は離される一方だった。

夏休み。明彦は猛烈に勉強した。机に向かってノートを開いたとたんに、彼女のみごとな水着写真が脳裏にちらつき、下半身が熱くなり、何も目に入ってこなくなる。それでも、必死に邪念を払いのけた。その甲斐あって二学期の中間試験では2位に復帰した。だが、彼女との差はますます開いていた。彼女は、すべての課目で満点だった。

彼なりに努力してそれなりに結果を出したにも係わらず、結果を知ったママは金切り声を張り上げ、明彦が登校中に彼の部屋にこっそり潜入し、ため込んでおいた写真集やグラビアの類を全部没収してしまった。

明彦は逆上した。もはや手に入りそうもない貴重な写真も、あっさりと燃えるゴミの日の清掃車がどこかに運んでしまった。その恨みは、ママではなく、かの女子生徒に向けられた。

要するに、彼女さえいなければ、自分は1位になれるはずだ。彼女さえいなければ…。畜生、高校なんか卒業しなくて、その胸と顔でさっさと東京にいつて、芸能界に入っちゃえばいいんだ。そして遊び人の乱交パーティにでも招かれて、ドラッグやって、逮捕されちまえ！

明彦は、彼女がそんな転落の人生を送る妄想に耽りながら、右手を動かした。そして興奮が静まった後は、とてつもない虚脱感に包まれ、自己嫌悪に苛まれるのである。

恨みは内向し、蓄積され、発酵し、とうとう明彦はとんでもない計画を思いついた。

要するに、彼女が試験を受けなければいいのだ。全部の試験じゃなくてもいい。一科目だけでも、試験を受けられなければ。

この卑劣な思いつきに明彦は歓喜した。後は、どうやって彼女を試験場から排除するからだ。

やったぞ、やった、ばっちりだ！

明彦は、小遣いをはたいて買った小型8ミリビデオカメラの液晶画面を再生し、とびあがらばかりに狂喜した。

この日の早朝、明彦は、こっそりと体育館脇の女子更衣室に忍び込んだ。その日、一時間目に彼女のクラスの女子は体育の授業があることは事前に調べてあった。ドキドキしながらカメラを設置し、更衣室を出た。

中休み、明彦は再び女子更衣室に潜入してカメラを回収。その日は一日、心ここにあらずだった。飛ぶようにして帰宅し、再生してみた。果して、画面の中央、よく見える位置で彼女は着替えを始めた。ブラウスを脱ぎ、ブラジャー一つになった。大きな胸の谷間がくつきりと刻まれていた。すぐに、その谷間は体操着に覆われてしまったが、成功には違いない。

まずは自分でたっぷりと楽しんだ。それから、ひたすら期末試験の日を待った。

期末試験の始まる一週間前の夕方。

「かをり、電話よ」

「はい」

携帯ではなく、家の電話だ。誰だろうと小首を傾げながら居間に降りた。

「はい」

受話器を取り上げると、妙にくぐもった声が出た。

「あ……あんたの、着替え写真持ってるんだけどね」

さつと顔から血の気が引いた。相手は続けた。

「お宝だぜ。写真週刊誌とか持っていったら、結構いい値がつくんじゃねえかな」

「……誰？」

台所の母親に聞かれないように声を潜めた。

「とにかく、二十八日の午後十時、西条駅前南口のコインロッカー35番に10万円を入れておけ。そうしたら、写真は返してやる。いいな、南口のコインロッカー35番に10万円だ。自分で来いよ。でないと、恥ずかしい写真、ばらまいてやるからな」

電話は切れた。

金などどうでもよかった。明彦は、35番ロッカーにいきもしなかった。当日、わざと3分ほど遅刻した。彼女のクラスの前を通って確かめた。彼女は席にいなかった。

成功だ！

明彦は1位に返り咲いた。彼女は、あの試験を大幅に遅刻し、残り15分のところで教室に飛び込み、それでも70点近くをとって2位につけた。

いさんで帰宅し、ママに報告した。ママは案に相違してたいして喜びもせず、一回1位になつたくらいで慢心しちゃだめよ、これからもずっと1位になるのよ、と言った。

明彦は心が重くなった。1位になったといっても、犯罪すれすれの行為をやってかち得たもの

だ。だが、結局ママは喜んでくれなかったし、第一、彼女が明彦よりもたった5点差で惜しくも1位を逸したのがショックだった。

試験の度に、同じような罫を仕掛けなければ、永遠に彼女を抜けそうになかった。

気が重かった。

試験の三日後の日曜日の早朝6時、明彦は、郊外のひとけのない山の麓の神社にとぼとぼと向かっていった。そこで、彼女にビデオを返却するとコインロッカーの35番にメモを入れておいたのだ。

明彦は念のため、中年男のようなジャンパーに、野球帽を目深にかぶり、サングラスをかけ、つけ髭をつけて変装した。

彼女は、午後9時にここに来るはずだ。神社の賽銭箱の裏にそれを置いておく。変装したのは念のためだった。

崩れかけた石段をあがると、落ち葉に覆われた拝殿が見えてきた。明彦はきよろきよろと周囲を見回し、人の気配がないことを確かめてから、そっと落ち葉を踏みしめて拝殿に近づいた。賽銭箱の裏側に封筒に入れてガムテープで幾重にも巻いたビデオテープを置いた。

これで終わりにしよう……。

明彦は呟きながら、急いで帰ろうと踵を返した。

そのとき。

「お待ちい」

背後から声がした。ぎよつとして振り向いた。拝殿の扉が開いた。

「あつ」

驚いて叫んだ瞬間、頭に重い衝撃を受けた。目の前が真っ暗になり、明彦は拝殿から転げ落ちた。

失われそうになる意識を必死で取り戻そうと頭を何度も振った。落ち葉が積もっていたので地面に落つこちた衝撃はさほどでもなかったが、いきなり脳天に打撃を受け、体じゅうの神経が正常に作動していなかった。

涙に溜まった眼をやつと開けた。

彼女が立っていた。

ブラウスにカーデガン、ジーンズにスニーカー。手に竹刀を下げていた。

「どろっー！」

気合のこもった叫びが空気を切り裂き、竹刀が凄まじい勢いで突き出され、明彦の脇腹を打つた。

「うっ！」

明彦は、横薙ぎに吹っ飛ばされ、近くの杉の木の幹に叩きつけられた。膝が落ちそうになった。「やあっ！」

彼女が突進してきた。竹刀がまたも脳天めがけて振り下ろされた。明彦は目をつむり、両手をあげて頭をかばった。明彦の顔の前にぶうんと空気が唸りあげた。振り下ろされた竹刀は、明彦の体の数センチさきをかすって地面に落ちた。

それでも明彦は恐怖で両手で顔をガードしたままだった。しばらく静寂が流れた。明彦はおそるおそる薄めを開いた。

目の前に、竹刀を振り下ろしたポーズのままの彼女が立っていた。ニヤリと笑った。

つづいて、すさまじい衝撃が明彦の股間に炸裂した。彼女は、振り下ろした竹刀を勢いよく振り上げ、鞆丸に叩きつけたのだ。

目の前が真っ暗になった。激痛と嘔吐がこみあげ、筋肉が一斉に鳴動しはじめた。

「う、うう……」

明彦は両手で股間を抑え、そのままくずおれた。

激しく頬を叩かれ、明彦は意識を取り戻した。

彼は、拝殿のなかに座らされていた。両手と両足をガムテープで縛られ、片隅の柱にロープで

縛りつけられていた。

「気がついたん？」

この地方特有の、腹立たしいくらい抑揚のないのんびりとした方言だった。彼女がニヤニヤ笑って、膝をつき、彼を見下ろしていた。

「あんた、3組の子じゃね。たしか東京から来た……」

あつと叫びそうになった。彼はサングラスを外され、つけ髭もとられていた。

「なんで、こがいなことしたん？」

返事できなかった。明彦は俯いた。恥ずかしさと屈辱でいっぱいだった。彼女が中学時代、剣道部に所属していたことは知っていた。だが、まさか女の子にこんなかたちで逆襲されるなんて、思ってもみなかったのだ。

しかも、更衣室に忍び込んで盗撮したことを知られてしまったのだ。もうおしまいだ。積み上げてきたエリートのは道は閉ざされるだろう。たかが、グラビアアイドルのために……。

「ぎゃっ！」

股間にまたも激痛が走った。彼は、ズボンが脱がされ、ブリーフだけになっていた。彼女は、竹刀で突き上げられ、しくしく痛む鞆丸をひねりあげたのだ。

「言わんかったら、また同じことするよ」

またもひねられた。明彦は頭をのけぞらせ、「やめてえ！」と懇願した。涙が溢れ出た。

彼女は、サディステイックな笑みを浮かべた。

「やめてほしいんじゃないから、ちゃんとお言い」

言いながら、何か黒いものを顔面につきつけた。よく見ると、それはビデオカメラだった。

「ま……まさか……」

「ちゃんと記録させてもらうけんね」

全身の血が逆流した。1位になりたくて、盗撮し、脅迫し、試験を遅刻させた。そんなことをビデオに記録されてしまったら……。

「言わなかったら、これじゃけん」

またも睾丸をひねられた。さきほどとは比べものにならないくらい、指先に力をこめられた。

睾丸が陰囊のなかでめぐり返しになったようだった。明彦は激しく痙攣した。

「潰れても、しらんよ」

彼女の端正な顔に浮かんだ残忍な微笑が広がった。明彦は恐怖した。ほんとうにやりかねない。でも、自分がやったことが世間に知られてしまったら……。もし、ママに知られてしまったら……。

「あそう。じゃ、潰さしてもらうけんね」

言うなり、彼女は、ビデオカメラをおいて、今度は両手で、一個ずつ睾丸をつかみ、はげしくひねりあげた。明彦は、もはや悲鳴をあげることすらできなかった。「あがつ、あがつ」と嘔吐

を思わせる音が、大きく開かれた口から漏れた。頭のなかで電気が走り、バチバチと音を恥じけさせた。発狂しそうだった。

「い……い……い……」

「うん？」

彼女が指先にこめた力を緩めた。

「い……う……」

やつと言葉を絞り出した。

「ほんと？」

「……………」

明彦は無言で頷いた。

「嘘ついたら、潰すけんね。わかってるよね」

彼女は再びビデオカメラを構えた。

「信じられくん」

彼女は何度も首を振りながら、立ち上がった。

明彦は激しく嗚咽していた。涙を流しながらの告白を、彼女は呆れたように聞いていた。そしてその表情はやがて軽蔑にかわっていった。

「別に1番じゃって、2番じゃって、ええじゃん。大事なのは、ちゃんと志望の進路に進むことじゃないん？　なんでそんなに1番にこだわるん？」

「だって……」

ママに怒られるから……と明彦は呟いた。彼女は哄笑した。

「うっそ！　マザコンなん？　がいな子じゃなあ！」

涙を流し、体を折り曲げて笑った。明彦は、ますます顔を俯けた。もう彼女の顔をまともには見られなかった。完全な敗北だった。

「じゃったら、もうこんなものいらんなあ」

彼女は、スニーカーの先でちよんちよんと、明彦の三倍に腫れ上がった睾丸をつついた。明彦は悲鳴をあげた。

「一生、ママのおっぱい吸うとったらええんじやろ」

言いながら彼女は思い切り切り脚を後ろに振り上げ、勢いをこめて叩きつけた。明彦の睾丸が一瞬ひしゃげた。

雷が落ちたような衝撃だった。明彦の体をこれまで味わったこともない激痛が貫き、胃袋から口蓋に向かって血がこみあげた。

明彦は失神した。